

『太平記』巻四をめぐる諸本の構想と構成

谷垣伊太雄

『太平記』巻四は、後醍醐天皇の討幕計画が再び挫折し、笠置落城の後、関東方による戦後処理としての死罪・流刑が語られる巻である。この巻四の構成を、流布本（慶長八年古活字本を底本とする日本古典文学大系本による。以下、特に注記しない場合の「流布本」は、これを指す）を中心として、他の四本との比較を表にすると、表(一)のようになる。

その中で、流布本の①から③までの章段に相当する内容について、処罰等の対象となった人物を、流布本の順序に従って要約したものが表(二)である。

西源院本を除く四本では、採り上げられる人物の順序等に多少の差はあるものの、概観すれば、まず後醍醐天皇の家臣達についての処罰、続いて皇子四人の流刑等が語られる。しかも、一見したところ、それは、人名列記に似た構成をとりながら、単なる記録にとど

まらず、和歌をちりばめた哀話を適宜配する事などによって、敗れた後醍醐天皇方の人々の悲嘆に、作者が身を寄せる形で語られ、最終的には、敗者側の中心人物たる先帝（後醍醐天皇）の隠岐配流を、長文の呉越合戦故事を引用しつつ、同情的に語っていく構成となっている。この点に関しては、夙に、『増鏡』との比較等に基づいて、巻四の構成を詳細に検討された、鈴木登美恵氏の卓見に充ちた御論考もある。

次に、表(二)の内容について、もう少し詳しく見てみよう。流布本を基準にして考えた場合、皇子達の流罪等を前半に配置した西源院本に、大きな差違が見られる。西源院本には①⑩⑪がなく、⑨の藤房の悲恋哀話に登場する女房名を「中宮輔御局」とする（流布本では「左衛門佐局」）。⑫の峯僧正俊雅（春雅とも書く）の配流地について、玄玖本・梵舜本・流布本が、対馬国から長門国に変更になった事を記すのに対し、西源院本（義輝本も）は、長門国への配流のみを記す。そして、西源院本は「前帝之御外戚峯僧正春雅ヲハ長門國へ奉流テ、探題ニ被預」（傍点筆者。以下同じ。義輝本にはこ

表(一)

流 布 本	玄 玖 本	西 源 院 本	梵 舜 本	義 輝 本
①笠置囚人死罪流刑事付藤房卿事 ②八歳宮御歌事 ③一宮并妙法院二品親王御事 ④俊明極参内事 ⑤中宮御歎事 ⑥先帝遷幸事 ⑦備後三郎高德事付吳越軍事	○笠置囚人死罪流刑之事 ○俊明極参内之事 ○吳越師之事	○萬里小路大納言宣房卿歌事 ○奉流宮々事 ○前帝遷幸事并俊明極参内事 ○和田備後三郎落書事 ○吳越闘事	○笠置囚人死罪流刑事 ○藤房卿事 ○八歳宮御歌事 ○一宮并妙法院三品親王御事 ○俊明極参内事 ○中宮御歎事 ○先帝遷幸事 ○吳越軍吏	○囚人罪責評定事 ○八歳宮御歌事 ○一宮妙法院配流事 ○俊明極来朝参内事 ○中宮六波羅行啓事 ○先朝隠岐国遷幸吏 ○児島高德行跡吏 ○吳越戦吏 ○隠州府嶋皇居事

の傍点部分はない」と記し、俊雅の扱いが一般的なものではなかったことを語っている。

次に梵舜本を見ると、④の殿法印良忠に関する記事がない(義輝本も)。良忠は、捕縛され尋問を受けた際にも、自分達の行為の正当性を堂々と論じ、そのため六波羅側としても評定がなかなか決定せず、結局「法印ヲバ五條京極ノ籙、加賀前司ニ預ラレテ禁籠シ、重テ關東ヘゾ被ニ注進ケル」(流布本による。他本もほぼ同文)という事になった人物である。したがって、先帝側の立場を公然といわば論理的に弁護する良忠が、巻四の中で採り上げられるか否かは、巻四の巻末に置かれた作者の批評と対応させてみて、作品の

構成・作者の論理を窺う上で重要であると考えられる。

梵舜本は、③については、源具行に対する警固役佐々木道誉の恩愛、および具行の斬首後、道誉がその菩提を弔った記事がなく、具行の辞世の頌も斬首の日付も記さない。
(注2)

次に義輝本を見てみよう。①の足助重範は、巻一の無礼講を装っての討幕計画の段階から参画していたとはいえず、一地方武士にすぎない。その彼が、巻四のはじめにおいて、何故まず六条河原で首を刎ねられる事になったのかという事情は、他本では語られてはいない。ところが、義輝本は「是笠置ノ城ニテ大矢ヲ射テ、イカメシク行跡タリシ其故トソ聞シ」と語るのである。巻三の笠置合戦で活躍

したために、いわば見せしめ的に最初に処刑される重範の運命は、
巻一において、土岐頼員^(注3)の返り忠によって自害に迫いつめられる多

治見国長^(注4)（彼も「無礼講」から参画していた）の場合などとも対応
する人物形象と言えよう。^(注5)

表(一)

流布本（上段は人物、下段は処罰内容。下欄四本の数字は流布本の数字による。）	
①足助次郎重範	六条河原で斬首と決定。
②万里小路大納言宣房卿	子息二人の罪科によって逮捕、囚人同様の処遇。
③源中納言具行卿	佐々木道誉が警固して鎌倉へ。六月十九日、近江柏原にて斬首となる。
④殿法印良忠	六波羅にて尋問され、加賀前司に預けられ禁籠となる。
⑤平宰相成輔	河越円重が具足して鎌倉へ。途中の相模早河尻にて斬首。
⑥侍従中納言公明卿・別当実世卿	赦免が変更、波多野・佐々木に預けられ、帰宅ならず。
⑦尹大納言師賢卿	下総国へ配流、千葉介に預けられる。やがて許されて剃髪、のち円寂。
⑧東宮大進季房	常陸国へ配流、長沼駿河守に預けられる。
⑨中納言藤房	常陸国へ配流、小田民部大輔に預けられる。
⑩按察大納言公敏卿	上総国へ配流。
⑪東南院僧正聖尋	下総国へ配流。
⑫峯僧正俊雅	対馬国が変更となつて、長門国へ配流。
⑬第四の宮	但馬国へ配流、守護大田判官に預けられる。
⑭第九宮	幼いので、中御門宣明卿に預けられ、都にとどまる。
⑮一宮中務卿親王	三月八日、佐々木時信を警固役として土佐の畑へ配流、有井三郎左衛門尉の館の傍の一室に迎えられる。
⑯妙法院二品親王	三月八日、長井高広を警固役として讃岐の詫間へ配流。

16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1	玄玖本
6 5 4 3 9 8 7 12 14 13 16 15 2	西源院本
16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 3 2 1	梵舜本
17 16 15 14 13 15 12 11 10 8 9 7 5 3 2 6 1	義輝本

又、③についての義輝本の記事は、他本に比べて少なく、柏原における具行の斬首さえ記されていない。

一方、⑦では、義輝本だけが、師賢の「北の臺」について記し、和歌二首をも付記している。藤房の場合における「佐衛門佐局」とやや類似した「北の臺」の設定は、この段落が哀話として語られようとした姿を示しているとはいえず、「和漢ノ才」に心を尽し、「遠流ノ刑」をさほど意に介さぬ師賢の人物像から見れば、必ずしも相乗効果をもたらしているとは言えない。⑧⑨の順序についても、長幼の序で言えば、義輝本のように、藤房・季房の順で採り上げるのが適切であろうが、引き続き藤房と佐衛門佐局との哀話が語られることを考えれば、やはり、他本のように、季房・藤房の順となっている方が自然かと思われる。

⑩で按察大納言公敏について「小山判官預り奉テ下野國へ下向セシガ、ヤカテ出家シ給ニケリ」と語るのは義輝本のみである。他本は配流先として「上総國」を記すだけである。又、⑬の妙法院の配流に続けて、⑭として「左兵衛督爲明モ御共ニテ同國ヘソ被流ケル」の一文を載せるのは義輝本のみである。「花園天皇宸記」元弘二年三月八日の条には「今日中書王妙法院宮兩人首途云々、武士警固如例、尊良親王爲明一人供奉、但參會敷、路頭不見云々」とある。^(注6)

こういう、⑩や⑬のような諸本による差違は、あるいは依拠した資料・記録類の有無によるものかとも思えるが、即断は許されない。

④⑫については先に言及した。なお、⑮一宮の配流記事が一部重複する形で採り上げられているのも義輝本のみである。義輝本の場合、「峯ノ僧正春雅〇長門國ヘ流サレ、一宮中務卿親王ヲハ土佐ノ畑ヘ流奉リ、第四宮ヲハ……第九宮ヲハ……」と書かれている。一見すると、一宮以下、皇子達についてまとめたように見えるが、その場合、妙法院について言及されない不自然さが残る。一宮・妙法院については、章段を改めて詳述されるわけであるから、右に傍線を付した箇所が、特にここが必要とは思えない。

いずれにしても、義輝本は、雑纂の側面を持った『太平記』の姿を窺わせるものとして、ある意味で、さまざまな問題を投げかけていると言える。

次に玄玖本を見てみよう。③で源中納言具行が頌を書き斬首となつた「六月十九日某」という日付が、玄玖本にはない。しかし、次項の殿法印良忠逮捕の日付が「同廿一日」と記されている事から考えれば、③の方は玄玖本の書き落しと考えるべきであろう。もう一点、⑪の聖尊の配流先が、玄玖本のみ「下野國」となっている。玄玖本の場合、流布本との差違も少なく、後醍醐天皇の隠岐配流という中心点に向かって、段階的に集約されて行くような構想のもとに、構成が整備されていると言えそうである。

二

本章では、表(一)の流布本③「一宮井妙法院二品親王御事」の章段

について、諸本の範囲を広げて、やや詳しく見てみよう。流布本の全文については、本稿末尾に「別表^(注8)」として掲げたが、諸本の差違について流布本を基準にしてまとめた表^(注9)をA項から順に見て行くこととする（なお、表^(注9)のB-Iが、別表の①-⑧に相当する）。

A項の○印は、流布本のように、二皇子の配流について、特に章段をたてるもの。×印は、玄玖本等のように（表^(注9)参照）、「笠置囚人」の中に二皇子のことも含めているもの。△印は、章段を立ててはいるものの、○印の諸本と異なる「奉流宮々事」という章段を立

表(三)

A、章段をたてる	流布本(慶八古)	玄玖本	松井本	神宮徴古館本	東教大本	相承院本	築田本	今川家本	内閣文庫本	正木本	西源院本	毛利家本	前田家本	米沢本	梵舜本	神宮文庫本	天正本	義輝本	野尻本	流布本(元八整)	太平記抜書
B、一宮、土佐の畑に配流	○	×	×	×	×	×	×	×	○	△	○	○	○	×	○	○	×	△	△	○	○
C、妙法院、讃岐国に配流	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△
D、二皇子、兵庫にて和歌の贈答	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
E、別れて一宮は土佐の畑へ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
F、有井館の傍の流謫地の様子	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
G、妙法院は讃岐の詫間へ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
H、流謫地(詫間)の様子	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
I、先皇(後醍醐帝)隠岐配流に決定	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

て、一宮↓妙法院↓第四宮↓第九宮の順に処遇を語る二本である。
B項からI項までの○印は、少差はあってもほぼ同文と見做しうるもの。B項△印の三本については別表①を参照（三本の本文は、義輝本によって代表させた）。斜線を付した正木本・西源院本は、二皇子の配流については語るものの、兵庫における和歌の贈答記事等がない。（これはC・D項についても同様である。なお、別表では、西源院本を掲げた。別表①②③を参照）。

C項で△印を付した諸本のうち、天正本・義輝本・野尻本につい

ては、別表②を参照。今川家本の場合は、別表②・③の流布本に傍線を付した箇所が「同シ道ニシモ別テ御下アリケレハ」と短くなっており、キリシタン版太平記抜書の場合は、別表②の流布本に波線を付した文を欠く。

D項△印については別表③の通り。

E項△印のうち、正本・西源院本は、前述したように二皇子の交流を記さないため、章段の冒頭から、一宮・妙法院の流謫地の叙述となる(E項・G項は、あるいはB・C項に含める事も可能であるが、続けて流謫地の描写となるため、E・G項に入れた。別表④⑥参照)。他の三本については、別表④参照。

F項×印は、「一宮ハ漂フ浪ニ漕レ行キ、身ヲ浮舟ニ召レテ、土佐ノ畑エト赴セ給ヘハ、妙法院ハ是ヨリ引別レテ……」(玄玖本による)というように、EからGに直結しているもの。なお、○印の六本間には差がほとんどない事を確認しておきたい(別表⑤参照)。

なお、FおよびH項の●印は、別表⑦の西源院本の欄に掲げた千日護摩の記事を指す。正本本は、西源院本と同文。内閣文庫本・流布本(元和八年付訓仮名交り整版本)は「前朝御歸洛」で始まり、文末を「千日カ間ソ修セラレケル」(内閣文庫本による)とする以外は西源院本と同じである。

天正本・義輝本・野尻本も、やはり千日護摩の記事を有するものの、三本間に差があるので、表四として掲げる事とする。三本のうち、天正本の本文には鮎齋が見られる。義輝本と野尻本とを比較した場合、「推量レテ哀也」という文脈につながる点から考えれば、

やはり流謫地における「淺猿敷キ賤屋」とは対照的な、都における「竹苑花閨ノ玉ノ砌」という語句をもつ義輝本の方が、人物・行動の哀切さを強調する語りとなっているとは言えよう。

表四

天 正 本	義 輝 本	野 尻 本
サレトモ都ヲ御出 ノ日ヨリ、千日ノ護 摩ヲ始テ、一人ノ御 祈ニ被誓サセ、痛哉 竹苑花閨ノ玉ノ砌ヲ 立ハナレサセ給ラム ト推量レテ哀也	サレトモ都ヲ御出 ノ日ヨリ、千日ノ護 摩ヲ始テ、一人ノ御 祈ニ誓サセ給ケルト カヤ、痛哉竹苑花閨 ノ玉ノ砌ヲ立ハナレ サセ給ヒ、淺猿敷キ 賤屋ニ遷住セ給ヘハ サコソ御意ヲ傷シメ サセ給ラント推量レ テ哀也	サレトモ都ヲ御出 ノ日ヨリ、千日ノ護 摩ヲ始テ、一人ノ御 祈ニ誓サセ給ヒ、淺 猿敷キ賤屋ニ遷住セ 給ヘハ、サコソ御意 ヲ傷シメサセ給ラン ト推量レテ哀也

ところで、この千日護摩の一文が、内閣文庫本・元和八年整版本では、F項の末尾に置かれ、他の五本では、H項の末尾に置かれている。前者の場合、千日護摩を修するのは一宮となり、後者の場合、妙法院という事になる。この点に関して言えば、卷一「儲王御事」で、「総角ノ御時ヨリ妙法院ノ門跡ニ御入室有テ、釋氏ノ教ヲ受サセ給フ」と記された妙法院のことと考える方が、適切であろう。^{注10)}

G項△印のうち、正木本・西源院本は、先述したように、都から直ちに配流地の記述となる。▲印の、この二本のみが、宅間三郎という人名を記す(別表⑥参照)。天正本・義輝本・野尻本の△印は、他項に比べれば表現上の差違は、やや少ない(別表⑥参照)。

H項△印のうち毛利家本は、流布本・冒頭部(別表⑦参照)の「是モ」がなく、末尾に「此有様ヲ傳ヘ承テ袖ヲヌラサヌ者ハ無カリケリ、浅増ト云モロカ也」という一文が加わっている。天正本・義輝本・野尻本については別表⑦の通り。

I項△印のうち、正木本・西源院本は、表(二)を見てもわかるように、公明・実世の処遇を語って「奉流宮々事」の章段が終わり、新しい章段(表(一)参照)が「前帝ヲハ承久之例ニ任テ、隠岐國へ移シ進スヘキニ定マリニケリ」という文で始まるのである。梵舜本・神宮文庫本は、流布本と同文であるが、「先皇ヲバ」以下を新しい章段としている。天正本・義輝本・野尻本も、やはりここから章段がかわる。表現上の差違については別表⑧を参照。

引き続き表田について略述しておこう。表田は、表(三)と異なり、諸本の表現上の差を徹視的に見ようとしたものである。上欄に掲げた流布本(別表参照)の表現と同じ場合は○印を付し、該当する文(語句)が無い場合は斜線を付けた。

①の×印は「一宮中務卿親王尊良」、△印は「一宮尊良親王」。正木本・西源院本の欄に(一)を付けたのは、○印ではあるものの、文脈が異なることを意味する(以下同じ)。なお、内閣文庫本は、

「親」字の右側に「尊良」と小記がある。「一」字の右側に「二」字がある。②の×印は「伏」地が無い場合。△印を付した天正本の「天地ニ仰テ」では意味不明になる。

③の×印は「御警固ノ武士共」と、接頭語がある場合。

④の×印は「妙法院三品親王尊澄」となっている場合(玄玖本は「三」字を削って「二」としている)、一応△印とした。△印のうち、毛利家本・米沢本・梵舜本・神宮文庫本・天正本・義輝本・野尻本は「妙法院三品親王」、正木本・西源院本は「第二宮妙法院」、太平記抜書は「妙法院三品親王尊澄」としている。

⑤の×印は「同道ニシモ別テ」、△印は「同道ニシテ別ニ」。

⑥は×印の玄玖本のみが、和歌の初句を「今日マテハ」とする。返歌の「明日ヨリハ」との呼応という点では、この方がふさわしいとも言えよう。△印は別表のように、違った和歌を載せている。

⑦の×印は、「是モ」という語句がない場合。表(三)F項とも関連があり、「土佐ノ畑」についての描写を欠く玄玖本等が、「讃岐ノ詫間」の段落で「是モ」と記さぬのは、これはこれで正しいと言える。△印のうち、今川家本は「是」のみ、天正本・義輝本・野尻本は「此所ハ」、その他の五本は「海邊」の前に語句がない。

⑧の×印は「樵歌牧笛」となっている場合。この語句は、「源平盛衰記」巻十「有王疏黄島に渡る事」にも「山路に日暮れぬれども樵歌牧笛の音もなく」などの用例が見られる表現であるが、流謫地の地理を考えれば、「漁歌」の方がふさわしいであろう。野尻本は「海歌」とする。

表四

① 一宮中務卿親王	② 仰天伏地	③ 警固ノ武士共	④ 妙法院二品親王	⑤ 憂名モ替ラス同ジ道ニ、而モ別テ	⑥ 今マデハ同ジ宿リヲ(和歌)	⑦ 是モ海辺近キ	⑧ 漁歌牧笛	⑨ (接統詞「去程ニ」なし)	⑩ 先皇	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	流布本(慶八古)
○	×	○	×	○	△	×	○	×	○	玄 玖 本
×	×	○	×	○	○	×	○	×	○	松 井 本
×	×	○	×	○	○	×	○	×	○	神宮徴古館本
○	×	○	×	○	×	×	×	×	×	東 教 大 本
○	×	×	×	○	×	×	×	×	×	相 承 院 本
○	×	×	×	○	×	×	×	×	×	築 田 本
○	○	×	△	○	×	○	×	×	○	今 川 家 本
○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	内閣文庫本
△	○	○	○	○	△	○	○	○	○	正 木 本
△	○	○	○	○	△	○	○	○	○	西 源 院 本
○	○	○	△	○	△	○	×	○	○	毛 利 家 本
○	△	○	△	○	△	○	○	○	○	前 田 家 本
○	○	○	△	○	△	×	×	○	○	米 沢 本
○	○	○	△	○	△	○	○	○	○	梵 舜 本
○	○	○	△	○	△	○	○	○	○	神宮文庫本
×	△	○	△	△	△	△	△	△	△	天 正 本
×	△	○	△	△	△	△	△	×	△	義 輝 本
×	△	△	△	△	△	△	△	×	△	野 尻 本
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	流布本(元八整)
○	○	○	○	○	○	△	○	○	○	太平記抜書

⑨の×印は、「去程ニ」として後醍醐天皇の隠岐配流決定の話に入るもの。表(三)のI項に関連して先述したように、ここから章段を改める本もあり、後醍醐天皇を「笠置囚人」の一人として列記的に捉えるか、他の「囚人」達とは異なる大きな存在として捉えるか、という問題につながっていくであろう。このあとに、後醍醐天皇の法体拒否の事情説明のため、過去に溯及する形で俊明極来朝説話が挿入されるので、笠置落城後の敗者処罰の話と先帝隠岐遷幸譚とは

中断された形になっている。しかし、第一章でも見てきたように、敗者の処罰が漸層的に語られて、やがてその中心たる先帝(後醍醐天皇)に集約して行く展開を考えれば、「去程ニ」という語句で、いよいよ中心人物についての叙述に移る事を意識する段階を経て、次には、新しく章段を立てる——このような過程をたどると考えても良いのではなからうか。

△印のうち、前田家本は「其比」とし「比」字の右に「程ニ」と

傍書する。天正本・義輝本・野尻本は、別表⑧のように、「去程二」とはあるものの、「先帝」に直接つながる文脈でその語句が使用されてはいない。

⑩の×印は「先帝」、△印は「前帝」。

ここでは、第二章で詳しくは言及しなかった表(三)のF・G・H項に関する問題を考えてみよう。

皇子達の中で、幼少のため流刑とはならなかった第九宮の場合でも、京都で預けられた中御門宣明との和歌説話的エピソードが詳しく語られ、記述の少ない第四宮の場合でも、「但馬國へ流奉テ、其國ノ守護大田判官ニ預ラル」と記されている。

先帝(後醍醐天皇)の場合になると、警固役としての千葉介貞胤・小山五郎左衛門・佐々木佐渡判官入道道誉の名を記し、配流地隱岐到着後は「佐々木隱岐判官貞清(清高が正しい―筆者注)、府ノ嶋ト云所ニ、黒木ノ御所ヲ作テ皇居トス」という風に語られる。

『梅松論』を見ても、「隱岐國ニ遷幸成奉ベキヨシ治定ノ間、御所以下用意ノ爲ニ當國守護佐々木隱岐守清高先立テ渡海ト云々」(引用は京大本による)と記されている。

『梅松論』は、一宮・妙法院については「翌日八日一宮ハ、讃岐・妙法院ハ、土佐へ遷シ奉由治定ノ間、其國守護人等各請取奉」と、配流先については錯誤を見せつつも、二皇子が「守護人等」に預けら

れた事を記す。

『太平記』の場合の「有井三郎左衛門尉」「宅間三郎」が、その「守護人等」に相当するものと考え事ができる。

ところで、別表からもわかるように、この章段は、母を同じくする二皇子が、同じ四國(『梅松論』の錯覚もこの辺から来たものである)に配流となる、という事がまず素材としてあり、「配所ハ共ニ四國」と意識された時に、兵庫での和歌の贈答という語りが生じ、一旦は「諸共ニ兵庫ノ浦ニ」到着した二皇子が、再び別れて「土佐ノ畑」と「讃岐ノ詫間」と下下っていく、と語る事によって、哀れさは強調され、配流者に対する同情の視点も鮮明になって行く。とともに、もうその段階では、二皇子が誰に預けられたか、という事は、さほど問題ではなくなってしまうのである。

表現上の多少の差はありつつも、諸本全部に共通する段落としての「讃岐ノ詫間」の描写(表(三)H項)は、「海邊近キ處ナレバ、毒霧御身ヲ侵シテ瘴海ノ氣冷ジク、漁歌牧笛ノ夕ベノ聲、嶺雲海月ノ秋ノ色」が「哀ヲ催シ、御涙ヲ添ル」ものとして語られている。

一方、一部の諸本にしかない「土佐ノ畑」の描写(表(三)F項)を見ると、「南ハ山ノ傍ニテ高ク、北ハ海邊ニテ下レリ」と地理的描写がなされ、その上で「松ノ下露」「磯打波ノ音」が涙を誘うものとして語られている。

一宮の土佐配流について詳述されている巻十八には「土佐ノ畑ト云所ノアサマシク、此世中共覺ヌ浦ノアタリニ流サレテ」とある(注12)が、巻四と合わせて考えても、一宮の配流地の有様が立体的に浮か

びあがつて来るわけではない。「土佐ノ畑」に相当スルト考えられる、現在の高知県幡多郡大方町の地理に比してみても、巻四の「南ハ山ノ傍」「北ハ海邊」という描写と現地とは結びつかない。そして、すでに第二章で瞥見したが、毛利家本が「讃岐ノ詫間」の描写のあとに「此有様ヲ傳ヘ承テ袖ヲヌラサヌ者ハ無カリケリ、淺増ト云モロカ也」と記した一文からも窺えるように、『太平記』作者は、「土佐ノ畑」や「讃岐ノ詫間」について実見したとは考えられず、「傳ヘ承」ることが限度であつただろうと思われる。

そう考えれば、先に触れた「南ハ」「北ハ」という表現も、地理的実景描写というよりは、二つの配流地描写に共通して見られる、対句的表現の中に解消されて行くものであるうし、そもそも二皇子の配流についても、

別表(数字の左、カッコ内の記号は表(三)と一致する)

流 布 本	義 輝 本	西 源 院 本
<p>(B)① 三月八日一宮中務卿親王ヲバ、佐々木大夫判官時信ヲ路次ノ御警固ニテ、土佐ノ畑ヘ流シ奉ル。</p> <p>今マデハ縦秋刑ノ下ニ死テ、龍門原上ノ苔ニ埋ル共、都ノアタリニテ、菟モ角モセメテ成ラバヤト、仰テ天伏レ地御祈念有ケレ共、昨日既先帝ヲモ流シ奉リヌト、警固ノ</p>	<p>猿程ニ一宮尊良親王ヲバ、佐々木大夫判官時信ヲ警固ニテ、土佐ノ畑ヘ遷シ奉ル。</p> <p>今マデハ縦ヒ愁刑ノ下ニ死テ、龍門原上ノ苔ニ埋モル共、都ノ辺ニテ、菟ニモ角ニモ成ハヤト、天ニ仰テ御祈念有シカトモ、其甲斐ナクテ既ニ都ヲ御出有シカハ、</p>	<p>同二年正月十日、東使問注所信濃入道々太上洛シテ、去年笠置城没落之刻ニ被ニ召取、給フ人々之國々配所之事定而、</p>

兄(一宮)―佐々木時信―土佐ノ畑―有井三郎左衛門尉

弟(妙法院)―長井高広―讃岐ノ詫間―宅間三郎

というように図式化してみると、この章段そのものが、対句的構成をとりうる条件を持っていたと見る事ができる。

玄玖本等が、巻十八で詳述される「一宮御息所事」をも視野に入れ、巻四では「有井三郎左衛門尉」も「宅間三郎」も記さぬ事によつて、また違った対句的構成を保った、と考えられぬ事もない。しかし、「宅間三郎」は出さずとも、「讃岐ノ詫間」の描写はあるわけだから、やはり「土佐ノ畑」の描写がない諸本の場合、この章段としての緊密度は薄められていると考えざるをえない。

その意味で、一宮・妙法院の配流を語るこの章段については、正本本・西源院本のような本文に、単なる記録ではない文学としての『太平記』の、原初的形態を想定してもよいのではないだろうか。

(E)④

武士共申合ヒケルヲ聞召テ、御祈念ノ御憑
モナク、最心細ク思召ケル處ニ、武士共數
多參リテ、中門ニ御興ヲ差寄せタレバ、押
ヘカネタル御泪ノ中ニ、
セキ留ル柵ゾナキ泪河イカニ流ル、浮身
ナルラン
同日、妙法院二品親王ヲモ、長井左近大夫
將監高廣ヲ御警固ニテ、讃岐國へ流シ奉ル。
昨日ハ主上御遷幸ノ由ヲ承リ、今日ハ一宮
被流サセ給ヌト聞召、御心ヲ傷マシメ給
ケリ。憂名モ替ラヌ同ジ道ニ、而モ別テ赴
キ給、御心ノ中コソ悲ケレ。初ノ程コン別
タニテ御下有ケルガ、十一日ノ暮程ニハ、
一宮モ妙法院モ諸共ニ兵庫ニ着セ給タリケ
レバ、一宮ハ是ヨリ御舟ニメシテ、土佐ノ
畑ヘ可有御下一由聞ヘケレバ、御文ヲ參
セ玉ケルニ、
今マデハ同ジ宿リヲ尋來テ跡無キ波ト聞
ゾ悲キ
一宮御返事、
明日ヨリハ迹無キ波ニ迷共通フ心ヨシル
ベ共ナレ
配所ハ共ニ四國ト聞ユレバ、セメテハ同

御泪ノ中ニカクハカリ、
セキトムルシカラミソナキ泪川イカニ流
ル、ウキ身ナルラン
ト誦シ給シカハ、誠ニモト覺テ御警固ノ武
士モ皆泪ヲソ促ケル
妙法院三品親王ヲモ、長井左近大夫將監
高廣ヲ御警固ニテ、讃岐國へ流奉ル。左兵
衛督為明モ御共ニテ同國ヘソ被流ケル。
ニ有シカトモ行末マ(ニ)テハ
一宮モ妙法院モ兵庫ニ着セ給ケレハ、御悅
有テ互ニ音信有ケルニ、
一宮カクソ遊シケル、
イトセメテウキ人ヤリノ道ナカラ同シ泊
ト聞ソウレシキ
返夏細々ト遊テ其奥ニ
明日ヨリハ跡ナキ浪ニ迷トモフ通心ヨ知
ヘトモナレ
サテモウキナカラ配所ハ共ニ四國ト聞ヘ

西 蔵 獨 本

— 36 —

⑧

先皇ヲバ任_ニ承久例_ニ、隠岐國へ流シ可_レ
進_ニ定マリケリ、

御意ヲ傷シメ給ラント推量レテ哀也、

△俊明極来朝参内事▽

去程ニ宮々ヲ始進テ卿相雲客ニ至マテ死
罪配流ニ行ヒ奉リヌ。先帝ヲハ承久ノ例ニ
任テ、隠岐國へ遷幸成奉ベシト評定一決シ
タリケルガ

(注記)

- 1、「太平記卷四の考察」(『國文』第十五号・昭和36年6月)。
- 2、卷一では「重成」とする本(流布本・西源院本など)もある。『参考太平記』は、『足助系図』に拠って、六条河原で斬首となつたのが重範の子「重政」であると注する。なお、天正本は、斬首を元弘二年五月三日とする。
- 3、『尊卑分脈』に拠れば「頼春」。
- 4、卷一「頼員回忠事」。
- 5、③の和歌については、玄玖本・西源院本が三首、梵舜本・流布本が二首、義輝本が一首となっている。
- 6、『増鏡』卷十六「久米のさら山」には「中務の御子、土佐國へおはします。御供に爲明中將まいる」とある。
- 7、一字不明。「ハ」か。
- 8、流布本および、義輝本・西源院本を対照表とした。
- 9、表(三)のうち、「流布本(慶八古)」は、第一章冒頭に注記したものの、「流布本(元八整)」は、元和八年付訓仮名交り整版本。なお、「前田家本」は卷三、「きりしたん版太平記抜書」(全六

卷二。

- 10、注1の鈴木論文も「法体の妙法院宮に関する記述とするべきであらう」とする。
- 11、卷十八「春宮還御事付一宮御息所事」。
- 12、西源院本による。玄玖本・流布本等だけでなく、卷四を欠く神田本・京大本も同文である。
- 13、拙稿「尊良親王配流譚をめぐって―『太平記』の一研究―」(『王朝』第九冊・昭和51年6月)参照。
- 14、注1の鈴木論文は、西源院本系の本文に「原初的形態がある程度は残されてゐることを、認めるべきだと思ふ」とし、最新刊の永積安明氏の『太平記』(一九八四年六月二五日刊・岩波書店)も、「西源院本などは、中でも古い形態をとどめた伝本である」としておられる。

なお、本稿を成すにあたって、諸本の写真版をお見せいただいた長坂成行氏に衷心より感謝申しあげる。(昭和59年9月4日)

(本学助教授)